

特 61

96



芝  
 洞  
 義  
 義

明治  
 44. 7. 1  
 内交





冠注  
曹洞教會修證義目次

第一章	總序	一
第二章	懺悔滅罪	一三
第三章	受戒入位	二〇
第四章	發願利生	三九
第五章	行持報恩	五七



附 録

承陽大師傳……………一

常濟大師傳……………一六

曹洞宗聖日表……………三〇

目 次 終

冠注 曹洞教會修證義

第一章 總序

第一節

生を明らめ死を明らむるは、

佛家一大事の因縁なり、生死

の中に佛あれば生死なし、但

○編纂の由来 曹洞宗

の安心起行の標準を簡明に

知らしめん爲め、當時の兩

大本山貫首高祖承陽大師の

「正法眼藏」中より修證に適

切なる聖訓を選びて之を編

纂し、明治二十三年十二月

一日之を頒布して道俗に示

す

○本書の概要 第一章

總序、第二章懺悔滅罪、第

三章受戒入位、第四章發願



利生、第五章行持報恩の五章三十一節に分たれ、全編三千七百零四字

○曹洞教會 曹は曹溪

慧能禪師、洞は洞山良价禪師を云ふ、我高祖承陽大師

その法門を傳來し、太祖常

濟大師之を擴張する故にそ

の法系を曹洞宗と云ふ、教

は教義、會は會合、今は曹洞宗の教義の下に會合團結する道俗を云ふ

○修證義 修はナサムと訓じ修行、(發願利生行持報恩)證はサトリと訓じ證果(懺悔滅

罪受戒入位)證は教義なり、然れども修も證上の修、證も修中の證にして畢竟修證不二な

生死即ち涅槃と心得て、生死  
として厭ふべきもなく、涅槃  
として欣ふべきもなし、是時  
初めて生死を離るゝ分あり、  
唯一大事因縁と究盡すべし。

る故に本證妙修也、而して四大原則各々に修と證とを具備す

○總序 猶ほ總論と云ふが如く、修證義一篇の總體に通じたる宗要なり、此章に六節あり

○生を明め云々 生とは出生の由來、生存の意義なれば、過去と現在にかゝり、死

とは死後なり、生死の二字に過去現在未來の三世を包含す、「明め」とは體達するなり

○佛家 佛敎を信する出家在家を云ふ

○一大事の因縁 最も大切なる事柄にして結局の目的なりとの意

○佛 佛陀、覺者と譯す、生死の真相に體達し覺了したる也

○涅槃 大經に、涅槃不生と言ひ、槃を不滅と言ひ、不生不滅を大涅槃と名くとあり、

生死の繫縛を離れたる境界也

○厭欣 生死と涅槃とを各別に見るが故に此生死を厭ひ彼涅槃を欣ふの妄情を生ず、生

死即涅槃と體達する時、欣厭の生すべき無し

○究盡 究は「キハメ」盡は「ツクス」なり、研究し盡すの意



○人身云々

涅槃經に

六難を説く、一に佛世に遇ふこと難し、二に正法を聞くこと難し、三に慈善心を生ずること難し、四に中國に生ずること難し、五に人身を得ること難し、六に諸根を具すること難しと、八陽經に云く、天地の間に人と爲るは最勝最上にして、一切萬物より貴し

○宿善

宿世の善根力な

第二節

人身得ること難し、佛法値ふこと希れなり、今我等宿善の助くるに依りて已に受け難き人身を受けたるのみに非ず、遇ひ難き佛法に値ひ奉れり、生死の中の善生、最勝の生な

り、辨意經に人中に生ずる五事を擧ぐ、一に信念、二に憶念、三に梵行、四に仁愛、五に忍耐

○露命 人命の脆きこと

草葉に宿る露の如きなるを云ふ

○無常 事々物々變化して停まらざるなり、願中論

に三無常を説く、一には、分段無常、一期の死滅を云ふ、二には念無常、時々刻々

るべし、最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ。

第三節

無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身已に私に非ず、命は光陰に移



に變化するなり、婆娑論に  
一晝夜の間に六十四億九萬  
九千九百八十の刹那ありて  
五蘊(身心)生滅すとあり、  
三に自性不成無常、萬物の  
自性空なるを云ふ

○いかなる道の草  
地獄餓鬼畜生修羅人間天上  
の六道に輪廻するを云ふ  
○私に非ず 四大假和  
合にして、己と執するべき  
物なし

されて暫くも停め難し、紅顔  
いづくへか去りにし、尋ねん  
とするに蹤跡なし、熟觀する  
所に往事の再び逢ふべからさ  
る多し、無常忽ちに到るとき  
は國王大臣親暱從僕妻子珍寶  
たすくる無し、唯獨り黃泉に

○光陰 日光夜陰即ち晝  
夜なり

○紅顔 少年の顔色を云  
ふ

○蹤跡 アトカマ也、白  
髮の老人に、當時年少時代の  
の面影を尋ねるも蹤跡なし  
○往事 既に往き過きた  
る事柄

○親暱 那一寶に「親昵」  
に作る、曰く、昵は親近也  
愛也と、暱しき間柄の人々

赴くのみなり、己れに隨ひ行  
くは只是善惡業等のみなり。

第四節

今の世に因果を知らず、業報  
を明らめず、三世を知らず、  
善惡を辨まへざる邪見の黨侶  
には群すべからず、大凡因果



を云ふ

○黄泉 死後の境界也

○善悪業等 業は造作なり、今生に爲したる善悪業、因となりて、未來の果報を感ずるなり

○因果 原因結果也、天地間の事物は皆原因結果の道理に支配せらる、印度に無因論を執する外道あり、曰く、諸の内外の事、無量の差別、種々の生起、或は復た有時は諸の因縁を見るも空にして果報無し云々、正法念處

の道理歴然として私なし、造悪の者は墮ち、修善の者は陞る、毫釐も忒はざるなり、若し因果亡して虚しからんが如きは、諸佛の出世あるべからず、祖師の西來あるべからず。

經に曰く、善因は即ち惡報を受けず、惡因は終に善果を受けず

○業報 業は善惡業にして報は之に相應する果報なり

○三世 過去、現在、未來也、因果經に曰く、前世の因を知らんと欲せば則ち今世に受くるところのものは是れなり、後世の果を知らんと欲せば則ち今生に爲すところのものは是れなり

○善惡 善とは世を利濟する十善行、惡とは世を損害する十惡行也、第十五節可參照

○邪見 正法に反する見解なり、即ち四諦因果の法を了せざるなり

○歴然 分明なる貌

○墮ち 墮落なり、邪見のものは四惡趣に墮する也

○陞る 陞進なり、天上人間に生ずる也

○諸佛の出世 佛の大修行は大悟の果と現はれ、達磨大師支那に渡來せしに因りて禪風與隆の果を現はす



第五節

○順現報受 高祖大師曰く、あるひは善にもあれ、あるひは惡にもあれ、この生につくりて、すなはるこの生にその報をうくるを、順現報受業といふ。

○順次生受 高祖大師曰く、もし人ありてこの生に五無間業(殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血、破法輪僧)をつくれる、かならず順次生に地獄におつる

善惡の報に三時あり、一者順現報受、二者順次生受、三者順後次受、これを三時といふ、佛祖の道を修習するには、其最初より斯三時の業報の理を効ひ驗らむるなり、爾あらず

なり、順次生とはこの生のつぎの生なり

○順後次受 高祖大師曰く、人ありてこの生にあるひは善にもあれ、あるひは惡にもあれ、造作しなはれりといへども、あるひは第三生、あるひは第四生乃至百千生のあひだにも、善惡の業を感ずるを順後次受業となづく

○今生の我身 行誠上

れば、多く錯りて邪見に墮つるなり、但邪見に墮つるのみに非ず、惡道に墮ちて長時の苦を受く。

第六節

當に知るべし、今生の我身二つ無し三つ無し、徒らに邪見



人の歌に曰く、うれしくも  
 人とうまれてみ佛のさとりの  
 道もこれよりぞ入る  
 ○邪見 佛教の正理に相  
 違したる見解なり、今は主  
 として因果の道理を信せざ  
 るを云ふ

に墮ちて虚く悪業を感得せん、  
 惜からざらめや、悪を造りな  
 がら悪に非ずと思ひ、悪の報  
 あるべからずと邪思惟するに  
 依りて悪の報を感得せざるに  
 は非ず。

○第二章 四節に分たる

○懺悔 梵語に懺摩此に

悔過と譯し、過を悔ゆる意  
 なり、今懺悔と云ふは梵漢  
 兼擧なり、或は曰く懺は未  
 來の善果を修するを云ひ、  
 悔は已往の悪因を改むるを  
 云ふ、懺悔共にクニルと訓  
 す

○滅罪 業報差別經に曰  
 く、若し人重罪を作り已て  
 深く自ら責め、懺悔して更

第二章 懺悔滅罪

第七節

佛祖憐みの餘り廣大の慈門を  
 開き置けり、是れ一切衆生を  
 證入せしめんが爲めなり、人  
 天誰か入らざらん、彼の三時



に造らざれば、能く根本の業を抜く

○慈門 慈悲の門即ち懺悔なり

○輕受 佛教普通の説

○滅罪清淨 根本的に滅罪せしむるは我宗別途の説なり、故に儀軌には、身口意の三業を淨除して大清淨なることを得たりとあり

○誠心 華嚴經に曰く、我今盡く清淨の三業を以て後復た造らず

て、法界極微塵の一切諸佛の前に徧して、誠心に懺して後復た造らず

○恚麼 此の如くの意

○前佛 佛前の意也、小乗教は人前懺悔なり、佛前に懺悔の功德力、我と我を拯ふなり

○無礙 礙ゆること無く通達無滞の意

○精進 無雜を精と云ひ無間を進と云ふ、されば心

の惡業報必ず感すべしと雖も、懺悔するが如きは、重さを轉じて輕受せしむ、又滅罪清淨ならしむなり。

第八節

然あれは誠心を專にして前佛に懺悔すべし、恚麼するときは

前佛懺悔の功德力、我を拯ひて清淨ならしむ、此功德能く無礙の淨信精進を生長せしむるなり、淨信一現するときは、自他同く轉ぜらるるなり、其利益普ぬく情非情に蒙ぶらしむ。



を専らにして間斷なく進むの意

○自他 自身他人也

○轉 轉動の意にして惡

を斷して善に轉じ、迷を去りて悟を開くなり

○情非情 情は有情にして人畜禽獸等、非情は木石等

○障道 受戒入位發願利生行持報恩の道を障礙するを云ふ

○得道 佛道の悟りを得ること

○せりし してありし

○其功德 懺悔の力による即障消滅の功德也

○無盡法界 無限の世界也

○充滿彌綸 遍く行きわたる意

○哀み 前佛の大慈悲也

○佛祖の往昔 梵網

第九節

其大旨は願くは我れ設ひ過去の惡業多く重なりて障道の因縁ありとも、佛道に因りて得道せりし諸佛諸祖、我を愍みて業累を解脱せしめ、學道障り無からしめ、其功德法門普

ねく無盡法界に充滿彌綸せらん  
哀みを我に分布すべし、佛祖の往昔は吾等なり、吾等が當來は佛祖ならん。

第十節

我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身口意之所生、一切



經に汝は是れ當成の佛、(當に今後佛になるべきもの)我は是れ已成の佛なり(既に道を成就したる佛)是の如きの信を作せば、戒品既に具足す

○我昔所造 此の四句偈は華嚴經普賢行願品にあり、之を和譯すれば、我昔

造る所の諸の惡業は、皆無始の貪瞋痴に由る、身口意より生ずる所なり、一切我れ今皆懺悔す  
○無始 時間は無限なり、時間無限なる故に萬物の起滅も無限なり、何時を以て始めとすべからざる故に無始と云ふ

我今皆懺悔、是の如く懺悔すれば、必ず佛祖の冥助あるなり、心念身儀發露白佛すべし、發露の力罪根をして銷殞せしむるなり。

○貪瞋痴 貪欲(邪なる食)財、色、食、名、睡の上起す、瞋恚(邪なる瞋)此に三種あり、非理の瞋、順理の瞋、評論の瞋なり、愚痴(因果の道理を辨へざる)此に三種あり、計斷常の痴、計有無の痴、計世性の痴なり、此等は皆善心を害する故に毒と云ふ、此の三毒根本となりて、無量の罪惡を生ず

○身口意 身は行作、口は言語、意は思惟也、貪瞋痴の三毒より起る行作に三惡、(殺生、偷盜、邪淫)言語に四惡、(綺語、妄語、惡口、兩舌)思惟に三惡、(慳貪、瞋恚、邪見)合せて十惡業を起し、展轉して無量の罪惡を生ずるなり

○冥助 冥はクラシと訓す、吾等の見聞し能はざる冥々の間に佛祖の助けあるを云ふ



○心念 心念は誠心なり、身儀は身の行作にして、

佛前に合掌低頭するなり、

發露白佛は口業にして發はヒラクと訓じ、露はアラハ

スと訓じ、我昔所造の懺悔文を唱ふるなり、こゝに於

て身口意の三業相應す、白は告なり、佛前に告白する

なり

○發露の力 具に云へば、心念身儀發露白佛の力

### 第三章 受戒入位

#### 第十一節

次には深く佛法僧の三寶を敬ひ奉るべし、生を易へ身を易へても三寶を供養し敬ひ奉らんことを願ふべし、西天東土

佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり。

○罪根 罪惡の根本即ち無明なり

○銷殞 銷はトラカス、キヌルと訓じ、殞はオツル

なり、銷殞の二字にて消除の意となる

○第三章 六節に分たる

○受戒入位 戒は制止の義にして、非を防ぎ惡を止むるなり、而して戒に大小淺深の別あり、我宗の戒は、最も高尙幽玄にして、佛祖正傳菩薩戒と稱し、十六條あり、條目は後に擧ぐ、此の戒を受けて即ち諸佛の位に入るなり

○佛法僧 佛は總じては三世諸佛、別しては釋迦牟尼佛、法は總じては八万四千の法、別しては佛祖正傳の戒法なり、僧は總じては上は佛在世の佛弟子より、下は現在の僧侶なり、別しては佛戒相傳の我宗の祖師僧侶なり、猶ほ三寶に一體三寶、現前三寶、住持三寶の別あれども今は略す



第十二節

○三寶 實は勝妙尊貴の義なり、佛法僧の三は迷を轉じ悟を開く勝妙尊貴のものなる故に三寶と云ふ

○生を易へ 小乗戒は盡形壽とて一生涯に限れども、我宗は未來無際限なり

○西天 天竺なり

○東土 支那日本なり

○薄福少徳 夙に善根を植えず、福慧徳相の薄く少き者也、法華經に曰く、

若し薄福少徳の衆生は、三寶の名字猶ほ聞き奉らざるなり、何に況や、歸依し奉ることを得んや、徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し、或は外道の制多に歸依すること勿れ、

是の諸の衆生は、惡業の因縁を以て、阿僧祇劫を過ぐるも、三寶の名を聞かず

○衆生 衆縁の所生なる故に衆生と云ふ、實は一切の生物に通ずれども、今は且らく人類に就て云ふ

○歸依 高祖承陽大師曰く、歸は歸投なり、依は依伏なり、このゆゑに歸依と云ふ、歸投の相は、たとへば子の父に歸するがごと

彼は其歸依に因りて衆苦を解脱すること無し、早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて衆苦を解脱するのみに非ず、菩提を成就すべし。

第十三節

其歸依三寶とは正に淨信を專



し、依伏は、たとへば民の  
王に歸するが如し

○所逼 セマラレル即ち  
災難崇等の意なり

○外道 正理に入らざる  
を外と名け、但邪因を修す  
るを道と名く、佛教以外の  
宗教は外道なり

○制多 靈窟と譯す、外  
道の禮拜堂の如きなり

○衆苦 種々の苦難也

○解脱 解はホトク脱は

らにして、或は如來現在世に

もあれ、或は如來滅後にもあ

れ、合掌し低頭して口に唱へ

て云く、南無歸依佛、南無歸

依法、南無歸依僧、佛は是れ

大師なるが故に歸依す、法は

良藥なるが故に歸依す、僧は

ハナレ、ハツスと訓す

○菩提 道と譯す、即ち  
佛道なり

○如來 釋迦牟尼如來な  
り、成實論に曰く、如實の  
道に乗じ、來て正覺を成す  
る故に如來と名く

○現在世 釋尊在世

○滅後 釋尊入滅なられ  
たる後の世なり

○南無 救我、敬順、歸  
命、恭敬、信從と譯す

命、恭敬、信從と譯す

勝友なるが故に歸依す、佛弟

子となること必ず三歸に依る、

何れの戒を受くるも必ず三歸

を受けて其後諸戒を受くるな

り、然あれば即ち三歸に依り

て得戒あるなり。



○大師 大導師なり、我を正道に導き玉ふ故に

○良藥 煩惱の病苦を治する故に

○勝友 勝れたる友なり、我をして悪を離れ善に入らしむる故に

○三歸 法苑珠林に曰く此の三寶(佛法僧)は諸の群生三乘七衆の爲めに歸仰する所となる、故に三歸と名く

○其後諸戒 優婆塞戒經に曰く、是の三歸依は乃ち是れ一切無量の善法乃至阿耨多羅三藐三菩提の根本なり

○感應道交 感は牽召

の義にして衆生に屬し、應はコメヘルと訓じ起接の義にして三寶に屬す、吾等の

第十四節

此歸依佛法僧の功德必ず感應道交するとき成就するなり、

感ずる心と、三寶の應する力との二た道が交互て一體不二となるを感應道交と云ふ

○天上人間 天上人間 修羅餓鬼畜生地獄の六道を云ふ

○生生世世 生生世世は、如何なる世界に生を受けても、在在處處とて、如何なる處にありてもなり

○積功累徳 功を積み

設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も感應道交すれば必ず歸依し奉るなり、已に歸依し奉るが如きは、生生世世在在處處に増長し、必ず積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり、知るべし、三歸の功



徳を果ねるなり

○阿耨多羅三藐三菩提

是れ梵語にして、阿耨多羅は無上と譯して此上も無いと云ふ意、三藐三菩提は正徧智と譯し、正しくして邪なること無く、徧く

行き渉れる智慧を云ふ、即ち佛の悟りなり

○不可思議 凡夫の思議分別し得べからざるを云ふ

○世尊 釋迦牟尼如來なり、佛の徳號に十種あり、世尊はその一なり、世間の中、最尊の徳を有し玉ふが故に

○證明 世尊の證明は、希有校量功徳經に曰く、若し三千大千世界の中に満る如來の數

徳其れ最尊最上甚深不可思議なりといふこと、世尊已に證明しまします、衆生當に信受すべし。

稻麻竹葦の如くならんに、教に人あり、此の諸の如來を悉く供養し奉りて滿二千歳の間飲食衣服臥具醫藥四事の奉納怠らず、尙ほ其諸佛の滅後に於て各々七寶の塔を起し、復た香華種々の供養を以てせんに其福徳實に多し、然れども人あり、純淨の心を以て佛法僧の三寶に歸依し奉りて得る所の功徳に比すれば百分の一にも及はずと、又、優婆塞戒經に曰く、是の三歸依は是れ一切無量の善法乃至阿耨多羅三藐三菩提の根本なり

○信受 信仰し受持するなり、受持はウケ、タモツにして身に實行するを云ふ

○三聚淨戒 瓔珞經心地觀經瓔珞本業經に説かる、衆はアツメルと訓じ、

淨は清淨にして身口意の三業清淨なるなり、大乘小乘一切の戒法皆此の攝律儀

第十五節

次には應に三聚淨戒を受け奉るべし、第一攝律儀戒、第二攝善法戒、第三攝衆生戒なり、



戒、攝善法戒、攝衆生戒に  
結歸し總括せらるゝが故に  
三聚淨戒と云ふ

○攝律儀戒 攝はナサ  
ムと訓じ、多くのものを一  
に統へ收むるの意、律は法  
律、乃ち一切の非行と惡行  
とを禁止すること、儀は儀  
式にて吾人の則るべき諸の  
軌範を云ふ、されば一切の  
戒法の中の「かゝる事は爲  
すべからず」と禁止せられ

たるものは、皆此の戒に攝  
せらる

○攝善法戒 善法とは  
道に順ひ理に契ふの行也、  
されば一切の戒法の中の  
「かゝる事は爲すべし」と示  
めされたるものは皆此の戒に攝せらる

○攝衆生戒 攝は攝受の義にして物を受取りて己に收むるの意、乃ち常に大慈悲の念  
に住して無邊の衆生を攝受し餘さず漏さず、誓て之を濟度し利益せんと期するを云ふ、三  
聚淨戒中、前の二戒は自利門にして後の一戒は利他門なり、更に之を佛の三徳に配すれば  
左の如くなり

攝律儀戒——止惡門(自利)——斷徳

次には應に十重禁戒を受け奉

るべし、第一不殺生戒、第二

不偷盜戒、第三不邪淫戒、第

四不妄語戒、第五不酤酒戒、

第六不說過戒、第七不自讚毀

他戒、第八不慳法財戒、第九

不瞋恚戒、第十不謗三寶戒な

り、上來、三歸、三聚淨戒、

十重禁戒、是れ諸佛の受持し

たまふ所なり。



攝善法戒——作善門(自利)——智徳

攝衆生戒——利生門(利他)——恩徳

○十重禁戒 梵網經の菩薩戒中、四十八輕戒に對して十戒を重禁と云ふ、しかれども、我宗の相傳にては別に輕戒を説かざるが故に、重は必ずしも輕に對するにあらず、重要な意と見るべし、禁は禁止の意也

○不殺生戒 一切の生きとし生けるものを殺すを戒む

○不偷盜戒 他人の財物を盗むを戒む、偷、盜共にメスミと訓す、盜に四種あり、強力を以て奪ふを劫取と云ひ、威嚇して取るを嚇取と云ひ、人目を掠めて窃むを偷取と云ひ、與へられざるを取るを不與取と云ふ、其他贓にあらずして、取るは、皆偷盜の部に攝す

○不邪淫戒 配偶にあらずざるを犯すを云ふ

○不妄語戒 正理正法に順せざる即ち虛言妄語を戒む

○不酤酒戒 酤はウツと訓す、酒は罪惡を作る因縁となるが故に、自身に之を飲むべ

からざるは勿論、大慈愍心を以て本とする佛家にありては、他人に酤りて身心を損害せしむべからず

○不說過戒 口を守り言語を慎み、虚りに他人の過失を説くべからざるを云ふ

○不自讚毀他戒 自は自身、讚はホメル、毀はソシル、他は他人、即ち僧徒國教の念を以て自ら高り他を侮辱するを云ふ

○不慳法財戒 慳はオシムと訓じ、法は道な修め解脱を得るの教法、財は一切物質上の實なり、過度の徳を起し、法を説いて人を導くことななざす、財を散じて貧者を救済することなざるを戒む

○不瞋毒戒 瞋はミヤルと訓じ瞋を立てて目を見張るの貌、毒はイカルと訓じ、恨み起るを云ふ、已れの心に合はざるは瞋に對しても瞋りに起るべからざるを云ふ

○不謗三寶戒 謗とは非理に應酬するを云ふ、三寶とはタカスの意なり、されば邪智妄見を以て三寶(佛法僧)を謗るを云ふ



○受戒 佛正傳の十六條戒を受くるなり

○三世の諸佛 過去現在未來の諸佛なり

○所證 証はサトルと訓じ、證得したる佛果をいふ

○阿耨多羅多羅三藐三菩提 無上正徧智と譯す、佛智也

○金剛不壞 佛果を稱讚したる語なり、金剛は天帝釋の所持する寶の名にして、其の質最堅固にして

一切の物之を壞すこと能はず、其の用最も銳利にして能く一切の物を壞る、佛果も亦た是の如く如何なる障礙も之を侵す事能はず、而して惡とし斷せざるは無く、魔として伏せざるはなし、故に不壞と云ふ

○欣求 欣は木ガヒ求はモトムルなり

○衆生佛戒 此の卅七字は梵網菩薩戒經の文なり

第十六節

受戒するが如きは、三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり、誰の智人か欣求せざらん、世尊明らか一切衆生の爲に示します、衆生佛戒

第十七節

を受くれば即ち諸佛の位に入る、位、大覺に同りし已る、眞に是れ諸佛の子なりと。諸佛の常に此中に住持たる、各各の方面に知覺を遺さず、群生の長へに此中に使用する、



○大覺 佛果位なり、覺は聲聞、緣覺、菩薩共に有すれども、部分の覺にして究竟の覺にあらざり、唯佛のみ究竟の覺を開き玉ふ故に大覺と云ふ

○此中 戒法の中なり

○住持 住はト、メ持はダモツ、佛法を永遠に維持するなり

○羣生 群類衆生にして一切の生きとし生けるもの

各各の知覺に方面露れず、是時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て、其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顯はす、是を無爲の功德とす、是を無作

を云ふ

○方面知覺 方面は眼耳鼻舌身に觸れる一切有形の物、知覺は是非善惡を分別する心の作用也、戒法は法性自然の妙理なるを以て三世十方の諸佛は一佛として此の妙

の功德とす、是れ發菩提心なり。

理に依らざるは無し、故に諸佛は此の戒法の中に在りて大道を流通し、大道を住持せしむ、されば佛々の淨土、佛々の形相相異なる事あるも、その方面の差別するまゝが戒法の上の活三昧なれば是非優劣の知覺をなすべからず、又衆生より見れば、戒法を離れたるものは一物としてあることなし、されは各々の知覺に於て貧富苦樂と差別するとも、その差別のまゝが、平等一枚にして、此外更に方面露れざるなり、かく觀じ來れば法界は皆戒法の活三昧なり

○十方法界 天地四方四維なり、法界は世界と云ふに同じ



○牆壁瓦礫 牆はカキ壁はカバ瓦はカワラ礫はツブチナリ

○風水の利益 風水とは四大の中の二大を擧げて他の地大と火大とを略す、天地も四

大の合成なり、吾等も四大の合成なり、その四大のまゝ、溪聲廣長舌、山色清淨身に

て、一切諸法此の四大の利益を蒙れり

○冥資 冥々の間に資けられて、吾も亦た覺らず、人も亦た覺らざるなり

○親さ悟を顯はす 此の戒徳に冥合するときは、天地も戒法なり、我等も亦た戒法

なり、萬象盡く是れ佛、我等も亦た佛なり、佛と我と一如、天地と我と同體、之を親さ

悟を顯はすといふ

○無爲無作 凡夫の分別妄想を以て作り爲すにあらざるを云ふ、即ち法爾自然の戒法

○第四章 八節に分た

る

○發願利生 誓願を發

して、衆生を利濟せんとす

るなり

○菩提心 菩提は梵語

此土に道と譯す、佛の覺り

たまへる道なり、その道は

衆生利濟に外ならず

○營む 經營するなり、

即ちその事柄を實行するこ

となり

### 第四章 發願利生

#### 第十八節

菩提心を發すといふは、己れ

未だ度らざる前に、一切衆生

を度さんと發願し營むなり、

設ひ在家にもあれ、設ひ出家



○天上 天上人間の二を  
擧げて他の四を略す、具に  
云へば天上人間修羅畜生餓  
鬼地獄の六道なり

○苦樂 苦は三惡道樂は  
三善道を云ふ、しかれども  
具に云へば天上人間等の一  
界一界に苦樂の差別あり

○自未得度先度他  
自らは未だ生死解脱の妙境  
に達する事を得ざるも、先  
づ他をして此の妙境に到ら

にもあれ、或は天上にもあれ、  
或は人間にもあれ、苦にあり  
といふとも、樂にありといふ  
とも、早く自未得度先度他  
心を發すべし。

第十九節

其形陋しといふとも、此心を

しめんとするなり

○陋し 果報拙き貧窮下  
賤のものなり

○導師 導はミチビク、  
師は師匠なり、十住斷結經  
に云く、導師と號するは、  
衆生の類に正道を示さしむ  
るが故に

○七歳の女流 七歳は  
齡の老幼に拘はらざること  
を現し、女流は男女に拘は  
らざることを示す、法華經

發せば、已に一切衆生の導師  
なり、設ひ七歳の女流なりと  
も即ち四衆の導師なり、衆生  
の慈父なり、男女を論ずること  
勿れ、此れ佛道極妙の法則  
なり。

第二十節



に八歳の龍女成佛したることを説く

○四衆 比丘(男僧)比丘尼(女僧)優婆塞(在家の信男)優婆夷(在家の信女)

○極妙 至極深妙なり、佛の教は應病與藥なれば、時に權方便として男女の別によりて成佛不成佛を説く

ことなきにあらざるも、今は佛道の至極深妙の上より男女無別を説くなり

若し菩提心を發して後、六趣四生に輪轉すと雖も、其輪轉の因縁皆菩提の行願となるなり、然あれば從來の光陰は設ひ空く過すといふとも、今生の未だ過ぎざる際だに急ぎて發願すべし、設ひ佛に成るべ

○法則 法、則ともなりと訓す、猶ほ教理と云ふに同じ

○六趣 趣は到の義、善惡の業因によりて到なり、その到る處に六あり、天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄なり

○四生 卵生、胎生、濕生、化生なり、卵生は殼に依りて生じ、胎生は母胎より生じ、濕生は濕を假りて

き功德熟して圓滿すべしといふとも、尙ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり、或は無量劫行ひて衆生を先に度して自からは終に佛に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり。



生じ、化生は植物が動物に變化し、或は空虚の處、忽ちに生物を産するが如きなり、經論の說によれば六道の中にて、天上、地獄、修羅は化生、餓鬼は化生あり胎生あり、人間、畜生は四生共にありと云ふ

○輪轉 輪廻轉生の義

○光陰 日光夜陰にして即ち月日なり

○回向 廻は轉なり、向は趣なり、自(自身)の萬行を轉じて他(他人)に趣向するなり

○無量劫 劫は梵語具には劫波、譯して時分と云ふ、即ち時間又は時期のことなり、無量劫とは限りなき長時間なり

○但し 唯の意なり

○四枚 枚は物の數なり

四通りと云ふも同じ

第廿一節

衆生を利益すといふは四枚の

○般若 般若は梵語、此土に智慧と譯す、即ち佛智なり、此に實智あり權智あり、眞如實際の理を觀るは實智にして、方便運用は權智なり、今は權智を主として云ふ

○薩埵 梵語、菩提薩埵の略語にして菩薩と云ふも同じ、譯語種々あり、覺有情或は高士と譯す、大論の釋に依れば、菩提を佛道の

般若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事、是れ即ち薩埵の行願なり、其布施といふは貪らざるなり、我物に非ざれども、布施を障へざる道理あり、其物の輕さを嫌はず、其功の實なるべきなり、



に名け、陸壇を成衆生に名  
く、天台解して云く、諸の  
佛道を用ひて、衆生を成就  
す、故に菩提薩埵と名くと、  
此説最も適切なり

○行願 行は實行にして  
身口の二業、願は誓願にし  
て意業なり

○布施 布は薄なり廣な  
り、アマネク、ヒロキの職、  
施はホドコスなり、布施を  
分ちて法施財施の二とな

然あれば即ち一句一偈の法を  
も布施すべし、此生佗生の善  
種となる、一錢一草の財をも  
布施すべし、此世佗世の善根  
を兆す、法も財なるべし、財  
も法なるべし、但彼が報謝を  
貪らず、自からが力を願つな

し、或は財施、法施、無畏  
施の三とす

○貪らざるなり 布施  
の根本義は慳貪の念を去る  
にあるを云ふ

○其功の實、効果の眞  
實なるを云ふ、即ち受者をして、苦を離れ迷を離れ身を立て道に修めしむるなり

○一句一偈 法施の上に就て云ふ、「諸行無常」の如きは一句なり、「我昔所造諸惡業、  
皆由無始貪瞋痴、從身口意之所生、一切我今皆懺悔」の如きは一偈なり

○此生佗生 此生は現世、佗生は未來永劫なり

○善種 善根の種子なり

○一錢一草 財施の上に就て云ふ

り、舟を置き橋を渡すも布施  
の檀度なり、治生産業固より  
布施に非ざることを無し。



○法も財なるべし 且らく法施財施と分つも、結局は自ら回融する道理あり、例せば自らは財物を施すこと能はざるも財を得るの法を教示する時は法施即ち財施となり、自らは法を説きて示す事能はざるも、財を投じて法を説く道をなせば財施即ち法施となるなり

○但彼が報謝を食らさず 凡そ布施に三等あり、施して而して後に悔ゆるは下、報謝を豫期して施すは中、報謝を豫期せずして施すは上なり

○力 日々勤る所の作業なり

○舟を置さる 諸徳福田經に七法の廣施を擧ぐ、一に佛圖僧侶會闍を興立す、二に園果浴池樹木清涼、三に常に醫藥を施し衆病を療治す、四に堅牢の船を作りて人民を濟度す、五に橋梁を安設して麻弱を過度す、六に道を近くし井を作り渴乏に飲を得せしむ、七に園圃を造作りて便利の處を施す

○布施の檀度 檀は梵語具には檀那、度は梵語波羅蜜の譯語、今は檀度の二字にてが

法と云ふ意なり

○治生 生活の道を立つることなり

○愛語 愛はイツグシム、アハレムと訓ず、慈愛の心自ら言語の上に現はれたるなり

○慈愛の心を發し 是れ愛語の根本義なり、若し此心なくして唯口頭に親切らしき語を發するも冗言冗語に過ぎず

第廿二節

愛語といふは、衆生を見るに、先づ慈愛の心を發し、願愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懐ひを貯へて言語するは愛語なり、徳あるは讚む



○顧愛 顧はイツクシム  
と訓じ、愛は親愛なり

○慈念衆生猶如赤  
子 法華經提婆品の文に  
して和譯すれば「衆生を慈  
念すること猶ほ赤子の如

しなり、愛情の濃厚なるも  
の親の子を懐ふの愛に勝れ  
たるものなし、今此の濃か  
なる慈愛の心を以て人に對  
するなり

○君子 ことにては深き

べし、徳なきは憐むべし、怨  
敵を降伏し、君子を和睦なら  
しむること愛語を根本とする  
なり、面ひて愛語を聞くは、  
面を喜ばしめ、心を樂しくす、  
面はずして愛語を聞くは肝に  
銘じ魂に銘ず、愛語能く廻天

意義あるにあらず、廣く一  
般の人を指す

○和睦 和はヤララグ、睦はシタシミ、ムツマロと訓す

○廻天の力 廻天は天を廻らすといふことにして、動し難き事をも動すを云ふ、唐の  
太宗洛陽宮修葺の大工事を始めんとす、時に天下疲弊し民大に苦む、仍りて張玄素太宗を  
切諫して遂にその工事を止めしむ、時の宰相魏徵大に賛助して、張公が事を論する廻天の  
力ありと云へり

の力あることを學すべし。

第廿三節

○利行 群に云へば利  
他行なり、利はヨロシと訓  
じ便益なることなり、私の  
便宜を捨て公衆の爲めに便

利行といふは、貴賤の衆生に  
於きて利益の善巧を廻らすな



益を計る行なり

○貴賤 此の二字を以て

あらゆる階級を細羅す

○利益 日常卑近の事柄

より難苦得樂轉迷開悟の法

なむ云ふ

○善巧 能く境遇事情を

鑒みて、巧みに機宜に適ふ

を云ふ

○窮龜 危急に遁れる

龜、孔餘の故事あり六十三

頁参考すべし

り、窮龜を見、病雀を見しと

き、彼が報謝を求めず、唯單

へに利行に催ほさるゝなり、

愚人謂はくは、利他を先とせ

ば、自からが利省れぬべしと、

爾には非ざるなり、利行は一

法なり、普ねく自他を利する

なり。

第廿四節

同事といふは、不違なり、自

にも不違なり、他にも不違な

り、譬へば人間の如來は人間

に同せるが如し、他をして自

に同せしめて後に自をして他

○病雀 病の爲めに死に

瀕せる雀なり、楊實の故事

あり六十三頁参考すべし

○利行は一法 自他の

所に、自利自ら備はる

○同事 同は和同、事は

儀なり、威なり、態なりと注

して、衆生の態度威儀に和

同すを云ふ、法界次第に曰

く、菩薩法眼を以て明かに

衆生の根性を見、其の所業

に隨ふて即ち形を分ちて示



現し、其所作を同うして、其をして各々利益に霑はしむ、是に因て親愛の心を生じ、依附して道を受け、眞理に住することを得、故に同事攝と名くと

○自にも不違 自分で自分に違背せぬなり、自己を欺かぬなり

○他にも不違 他の威儀態度に和同するなり

○人間の如來 釋迦牟尼佛、此の娑婆世界に身を現したまふには、托胎あり出胎等ありて人間の行相に同すを云ふ

に同せしむる道理あるべし、自他は時に隨うて無窮なり、海の水を辭せざるは同事なり、是故に能く水聚りて海となるなり。

○無窮 自にして他に同せしむことあり、また他をして自に同せしむることなり、時に隨て圓融す

○海の水を辭せざるは 管子に云く、海は水を辭せざる故に能く其の大を成し、山は土を辭せざる故に能く其の高を成し、明主は人を厭はざる故に能く其の衆を成す

○卒爾 卒はニワカ、イソカワシと訓じ、爾は助字、此の二字輕速の貌を云ふ、アワタマシク、ナホザリなるなり

第廿五節

○濟度攝受 濟はスクヒ、度はワタス、攝はオサス、受はウケルと訓じ、順

大凡菩提心の行願には是の如くの道理靜かに思惟すべし、卒爾にすること勿れ、濟度攝



緣功業共は攝受し濟度する  
なり

受に一切衆生皆化を被ぶらん  
功徳を禮拜恭敬すべし。

○第五章 六節に分たる

○行持報恩 行はオコ

ナヒ、持は持續にして、そ  
の行を持ち續ける也、華嚴  
經に云く、一切殊勝の妙行  
を勤修して無量無邊恒に厭  
足せざる是を行持と名くと  
報はムクロ、恩は恩徳、日  
々の行は或る報酬を目的と  
するにあらずして四恩に報  
謝する爲めなり。

○南閻浮 印度古來の  
説に須彌山の四方の大海の

第五章 行持報恩

第廿六節

此發菩提心多くは南閻浮の人  
身に發心すべきなり、今是の  
如くの因縁あり、願生此娑婆  
國土し來れり、見釋迦牟尼佛



中に四洲あり、東を弗提提、西を羅陀尼、南を閻浮提、

北を拘盧と云ふ、閻浮は樹の名、提は洲なり、此の大樹ある故に洲に名く、即ち此の吾等の住せる世界なり、大論には諸佛の出世したまふは唯南閻浮洲のみと説けり

○願生此娑婆 和譯すれば「願て此の娑婆國土に生る」なり、娑婆は梵語、忍土と譯す、菩薩は誓願を起し此の娑婆に出生して衆生を利濟したまふ、吾等も宿殖善根の備するところ此の娑婆に出生し來れり、喜ぶべきなり

○見釋迦牟尼佛 釋尊在世にて釋尊を見奉り、或は滅後にて釋尊の教法に逢ふ、釋尊を見奉るが如し、是れまた喜ぶべきことなり、釋迦は能仁と譯し、姓なり、牟尼は寂默と譯し、字なり、姓は慈悲物（衆生）を利するに従ひ、字は智慧理（眞理）に冥合するに取る

を喜ばざらんや。

○正法 佛祖正傳の吾が曹洞宗を云ふ

○拋捨 抛はナケウツ、捨はスツルと訓ず

○佛言はく 大般若經の取意

○無上菩提 菩提は道と譯す、無上道とは我が曹洞宗の教法也

○種姓 種は種族、姓は姓氏なり、種姓を觀するこゝと莫れとは種族の異同、姓

第廿七節

靜かに憶ふべし、正法世に流布せざらん時は、身命を正法の爲に拋捨せんことを願ふとも値ふべからず、正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし、見ずや、佛の言はく、無上菩提を



氏の高下を論すべからずとの意なり

○容顔 容は容姿にてスガタ、顔は顔色なり、此等の美醜によりて尊重の念を變すべからず

○非 過失なり

○行 行の是非

○般若 智慧と譯す、即ち佛道なり

○三時 初中後にして早晨午時、黄昏と分つもよし、

演説する師に値はんには、種姓を觀すること莫れ、容顔を  
見ることに莫れ、非を嫌ふこと  
莫れ、行を考ふること莫れ、  
但般若を尊重するが故に、日  
日三時に禮拜し、恭敬して更  
に患惱の心を生せしむること

されど今は從茲至夜の意なり

○患惱 患はワヅライ、ウレシ、惱はナヤムなり、

忌み嫌ひ倦み怠るを云ふ

○佛祖面面の行持

釋尊は十二年間の難行苦行  
あらせられ、達磨大師は滄  
海を渡りて支那に傳道せら  
れ、高祖は支那に到りて法  
を求められたる等をいふ  
○單傳 事死に云く、傳

莫れと。

第廿八節

今の見佛聞法は佛祖面面の行  
持より來れる慈恩なり、佛祖  
若し單傳せずは奈何にしてか  
今日に至らん、一句の恩尚ほ  
報謝すべし、一法の恩尚ほ報



法の諸祖、初め三藏の教業を以て兼ね行ふ、後、達磨祖師心印を單傳して執を破

し宗を顯すと、他宗他派の

經論によりて相傳すると異

り、禪門の傳授は心々相傳

する故に單傳と云ふと

○正法眼藏 佛祖單傳

し來れる曹洞宗の妙法を云

ふ、五燈會元に云く、祖師、靈山會上に在り、華を拈じ

謝すべし、況や正法眼藏無上大法の太恩これを報謝せざらんや、病雀尙ほ恩を忘れず、三府の環能く報謝あり、窮龜尙ほ恩を忘れず、餘不の印能く報謝あり、畜類尙ほ恩を報ず。人類争か恩を知らざらん。

て衆に示す、是時衆皆默然、唯迦葉尊者のみ破顏微笑す、世尊曰く、吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門有り、摩訶迦葉に付囑す

○三府の環 三府は三公なり、後漢の楊實、年僅に十歳の時、華陰山の北に遊びしに、一羽の黄雀鷓鴣の爲に搏たれて地に墜り蟻蟻に困めらるゝを見て憐憫の情を催し、之を懷

にして家に歸り、愛養すること百餘日、毛羽漸く全く、一日忽然として飛去る、其夜黄衣の童子來り、楊實に向ひ再拜して云く、我は是れ西王母の使者、蓬萊に生せり、君が仁愛

の深き我を拯ひ長く恩養を蒙むるを謝すと白環四枚を楊實に與へ、且つ曰く、君が子孫潔白にして三公の位に登ること此の環の如くなるべしと云つて隠れ去る、其後果して楊實

の子、楊震、楊震の子楊秉、楊秉の子楊賜、楊賜の子楊彪と續て三公の位に登れり

○餘不の印 晋の孔愉字は敬康と云へる人、或時遊歩して餘不亭と云へる處を過ぎりしに、漁父の大なる龜を籠に入れて往くに遇ふ、孔愉その龜の籠中に苦むを見て忽然哀感

の心を生じ、價をもつて之を買ひ求め、自ら携へて之を溪水に放てり、龜は水中に入りて



從容として游泳し、首を左に傾けて孔愉を見ること四回にして遂に潜み去れり、其後孔愉軍功ありて餘不亭侯となる、當時支那の例にては侯爵の印形の紐に龜を附けたる金印を鑄れり、依りて孔愉も鑄工に命じて餘不亭侯の印を鑄せしめたるに、紐の龜首左に傾けり、龜は不都合なりとて鑄なほさせしに、又龜首左に傾けり、凡そ三回鑄て三回共に龜首左に傾けり、是に於て孔愉悟る處あり、先年餘不亭に於て助けたる龜の精神、恩を報せんと欲して自然にかゝる不思議を現はすならんとて龜首の曲れる印を用ゐて名を天下に轟かせり

○日(にち)の生命(せいめい)を等閑(たうかん)にせず 生命(せいめい)を私利私欲(しりしよく)の爲(ため)に費(つぎや)さるるなり、本(ほん)事(じ)經(きやう)に曰(い)く、賢聖(けんせい)に値遇(ぢやくぐ)し、法語(ほふご)を聞(き)き、一生勸修(いっせうこんしゆ)し、

第廿九節

其報謝(そのほうしゃ)は餘外(よげ)の法(ほふ)は中(あた)るべからず、唯當(ただま)に日(にち)日(にち)の行持(ぎやうぢ)其報(そのほう)ら

後に無量無窮(むりやうむきゆう)の寶命(ほうめい)を得るも、また命(いのち)あるがためなり、  
SON  
命(いのち)の輕んずべからざるは、これによる

○善巧方便(ぜんぎやうほうべん) 巧妙(かぎやう)なる方法(ほふほふ)方法(ほふほふ)

○百歲(ひやくさい) 一生涯(いっせいや)と云ふが如(ごと)し

○形骸(けいがい) 身體(しんたい)なり

○聲色(せいしき)の奴婢(ぬひ) 聲色(せいしき)は具(ぐ)には、色(しき)、聲(せい)、香(かう)、味(み)、觸(そく)、法(ほふ)の六塵(ろくぢん)、即(すなは)ち一切(いっせつ)万(ばん)

謝(しゃ)の正道(しやうだう)なるべし、謂(い)ゆるの道理(だうり)は日(にち)日(にち)の生命(せいめい)を等閑(たうかん)にせず、私(わたくし)に費(つぎや)さざらん(と)行持(ぎやうぢ)するなり。

第三十節

光陰(くわういん)は矢(や)よりも迅(すみ)かなり、身(み)命(いのち)は露(つゆ)よりも脆(もろ)し、何(い)れの善(ぜん)



矯なり、心常に万境に對して惑亂し使役せらるゝ故に奴婢と云ふ

○馳走 馳、走、共にワシルと訓ず、東奔西走するなり

○行取 行ひの意

○度取 濟度の意

○行持現成 行持はオコナヒ、現成は實現するなり

○通達 大道が四通八達

して弘く實現するを云ふ

巧方便ありてか過ぎにし一日を復び還し得たる、徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり、悲むべき形骸なり、設ひ百歳の日月は聲色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せば一生の百歳を行取す

るのみに非ず、百歳の佗生をも度取すべきなり、此一日の身命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり、此行持あらん身心自からも愛すべし、自からも敬ふべし、我等が行持に依りて諸佛の行持見成し



諸佛の大道通達するなり、然  
あれば則ち一日の行持是れ諸  
佛の種子なり、諸佛の行持な  
り。

第卅一節

謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛な  
り、釋迦牟尼佛是れ即心是佛

○第三十一節 此の一  
節は第一節と照應す、細心  
に參究すべし

○即心是佛 承陽大師  
曰く、即心是佛とは、發心、

修行、菩提、涅槃の諸佛な  
り、いまだ發心修行菩提涅  
槃せざるは、即心是佛にあ  
らず

○參究 參は參學、究は  
キヲムル也

なり、過去現在未來の諸佛共  
に佛と成る時は必ず釋迦牟尼  
佛と成るなり、是れ即心是佛  
なり、即心是佛といふは誰と  
いふぞと審細に參究すべし、  
正に佛恩を報ずるにてあら  
ん。



冠注曹洞教會修證義(畢)

承陽大師傳

家系

誕生

幼時の聰明

曹洞宗の高祖と仰がれたまふ承陽大師道元禪師は、人皇六十二代村上天皇の皇子具平親王七世の孫に當らせらるゝ久我内大臣通親公を父とし、大織冠鎌足公の十八世の孫、攝政太政大臣藤原基房の御女を母とし、土御門天皇正治二年庚申正月二日(太陽曆に推歩すれば一月廿六日)を以て御誕生あらせらる。大師御齡三歳の時、父の通親公薨去せられ、仲兄大納言通具公に鞠養せられたまひしが、幼より穎悟にわたらせられ、四歳にして早くも李巨山の詩集なる李嶠雜詠を讀み、七歳にして周詩一篇を賦して通具公を驚かし、又、毛詩、春秋左氏傳等を讀



發  
心

みたまひしと云ふことである、しかるに大師八歳の時  
 に、母君は重き病の牀に就かれたが、到底その身の起た  
 ざるを知り給ひ、大師を枕頭に招き、懇に諭したまへる  
 やう、御身は、吾が亡き後は、髪を剃り、衣を染めて佛  
 の道を修し、吾等父母の冥福を祈り、兼ては、迷へる六  
 道四生の衆生を救ひたまへがし、是れ吾が最期の願なり、  
 と仰せられたれば、大師は此の母上の遺言に、幼心に  
 も必ず母上の遺言に随ひ、佛の道を修すべきを誓はれ、  
 母上は程無く此の世を去りたまひ、その葬儀を高雄寺に  
 て營まれるに當り、大師は龕前に跪きて、一瓣の香を焚  
 かるゝや、香煙の裊々として上り、篆書の乍ちにして生  
 じ、乍ちにして滅するを見て、あゝ、生ずるものは滅し、

來るものは去り、盛んなるものは衰ふ、人間萬事看來れ  
 ば此の如きのみと感じ、且つは母上の遺言もあることな  
 れば、いよく家を出て、道を求めんとすの御志を此時  
 に決せられたのである、これよりは、身は華胄の家にあ  
 るも、心は常に青山綠水の間に住し、世親菩薩の俱舍論等  
 を繙き、三四年間を経過せられた、かゝる間に大師の外叔  
 なる前攝政關白藤原師家公は、齡既に四十を超ゆるも嗣  
 とすべきものなきを以て養うて子となし一家の光榮を計  
 り、且つは皇室の輔相たらしめんとして、十三歳の春に  
 至れば元服の式を擧げたまふべき時機になつたのであ  
 る、しかし、大師は母上の喪に於て既に「心の出家」をな  
 し、今は唯「身の出家」をなすべき時機を待つて居られ



出家

たので、無論外叔師家公の家を繼ぐべき心は無いので、一夜、更闌け入定り、春月朦朧たるの時、心竊に多年の愛育慈撫の恩を謝しつゝ、家門を後にして比叡の麓なる良觀法眼（良觀は基房の子、師家の弟にして大師の母上の兄に當る）の門を叩かれた、法眼は事の餘りに突然なるに驚き、且つ家門親戚間の事情をも考へ、出家の志を翻さんと努められたるも、大師の決心は、到底動すべきにあらざれば、已むなく入室を許し、尋いて横川首楞嚴院の般若谷の千光房に留學せしめ、その翌年四月九日、天台の座主公圓僧正に就て薙髮し、その十日菩薩大戒を稟け、茲に始めて多年の希望を達し、出家の列に入られた、時に建保元年、大師御齡十四歳。

叡山の修學

建仁寺の修道

世俗の塵累を逃れたる大師は學道怠りなく、殊に浩漭なる大藏經の閱覽を始められたるに、無端大疑問に逢著せられ、大師は先づ之を一山の高僧碩學に問ひたまひたるも、いづれも明に答ふるものなきを以て、當時、學徳の名隠れなき三井寺の公胤阿闍梨に就て質したまひたるに、阿闍梨はこは我宗堂奥の玄談にして、傳教慈覺の兩大師より、累代口訣を以て傳承し來る所、しかれども、口、之を説くに甚だ苦しむ、近頃聞く、榮西なるもの、遙に宋土に入りて禪を傳へ來りて、建仁寺にありと、此の師に見えば蓋し得る所あらんと、懇に告げられたれば、山を出て、京都の建仁寺に榮西禪師を訪はれ、大師は前の疑問、即ち「本來本法性天然自性身なるに、何を以て



か三世の諸佛は發心し成道するや」と問はれたるに、榮西は、「三世の諸佛有ることを知らず、狸奴白牯却て有ることを知る」と答へられたので、釋然として氷解し、叡山に歸らずして、こゝに止り、榮西禪師や明全和尚の教を受けられたのである。

然るに、榮西禪師は幾くならずして遷化せられたので、専ら明全和尚に師事し、明全もまた深く大師を信じ、菩薩大戒を授け、且つ建仁寺の山規に特例を開き、修學未だ三歳を経ざるに更衣を許し、僧伽梨衣を授けられた、しかし明全は豫て入宋の志あり、大師もまたその希望ありしを以て、貞應二年二月、相伴うて入宋の途に就かれた、時に御齡二十四歳。

入宋修學

貞應二年五月、當時の名刹たる浙江省慶元府太白山天童景徳寺に到り、了派無際禪師に參じ、且つ禪林の清規に就て大に争ふ所あり、僧侶の席順は戒を受けたる新舊に依りて上下を定むべきに、天童山にては、外國より來りしものなればとて、此の清規を無視して、座位を定めんとしたるに依り、大師は此に抗争せられ、遂に再度、上表して理非を匡し、寧宗皇帝の嘉納せらるゝ所となり、「倭僧道元」の名は全國の禪林に響き渡ると共に、禪林の紊れたる風規を振肅せられたのである。

大師はこゝに止まること約二年にして、更に徑山の浙翁如琰、小翠岩の卓公、萬年寺の元鼎等の碩徳を歴訪して、大に知見を研かれたるも、未だ充分に大師の意を満足せ



悟だいし大師の大だい

しむるに足るもの無く、已むなく歸朝せんとまで思はれたるに、フト當時一代の宗匠たる長翁如淨禪師、勅請に應じて天童に晋院せられたることを聞き、再び天童に到り、如淨禪師の提擧を受けらるゝことになつた。

如淨禪師は、實に當代第一流の人であつたので、大師も深くこれに心服し、禪師もまた大師の非凡の人物なるを看破して特に之を提擧し、此間親密の情、父子の如くであつたが、一夜大師は例の如く、多くの人々と相並び坐禪して居られたるに、傍にある一僧、頻に睡眠す、依りて如淨禪師、切に之を誡めて曰く、「參禪は須らく身心脱落なるべし、只管に打睡して什麼をか爲すに堪へん」と大師傍より聞いて豁然として大悟し直ちに如淨の室

歸朝きしやう

に到りて焼香せられた。如淨曰く「焼香の事作廢生」、大師曰く「身心脱落し來る」。如淨曰く「身心脱落脱落身心」。大師曰く「這箇は是れ暫時の伎倆、亂りに他を印するることなかれ」、如淨曰く「脱落身心」と、茲に於て大師禮拜す、かくて大師は八歳にして無常の感想に打たれ、十四歳にして家を出て、爾來、經を繙き、論を披き、殊に築西の門に入られてよりは、心を參禪に凝らしたる結果、今は、從來の大疑問一時に消え、一大光明を發見せられたのである、是れ寶慶元年の夏にして、大師二十六歳の御時であつた。

かくて大師は如淨禪師の法を嗣いて釋迦牟尼佛より五十一代の祖師となり、内は如淨禪師を輔佐して後進を導き、



京洛の布教

外は李樞密、陳參政等の大官秀才を接して居られたるも、寶慶三年に至り、遂に如淨禪師に暇を乞ひ、歸朝の途に就き、安貞元年の秋、肥後國川尻に着せられた、時に御齡二十八歳。

大師の歸朝せらるや、先づ錫を京都の建仁寺に駐め、寛喜元年に山城國宇治郡深草の里なる安養院と云へる廢院に遷られ、更に極樂寺の舊趾に遷り、觀音導利院と名け、教化の任に當られたるも、その道場の餘りに狹隘なりしため、四方に勸募して、法堂及び僧堂を建立し、觀音導利院興聖寶林寺と改稱し、その化導はますます盛んになつた、此間に於て、大師の名聲は世に高くなり、淨土宗の良忠上人、臨濟宗の法燈國師の如きも、その門に參

北越の布教

ぜられたのである。

大師は安貞元年より寛元元年に至る十七年の間、京洛の地に於て化門を張られたるも、感ずる所ありて、居を寒郷寂地に轉ぜんとし、所々に地を相せられしに、豫て大師の門に教を請へる波多野雲州大守藤原義重その領地なる越前國志比の里に適當の地あれば、居に宛てられんことを請ひければ、その請ひを容れて、寛元元年七月、京都を發し、志比の莊内なる市野山の東、傘松峯の西に勝地を得て伽藍を經營し、翌寛元二年七月落成し、傘松峯大佛寺と云ひ、同年九月傘松峯を改めて、吉祥山と稱し、更に寛元四年六月、大佛寺を改めて永平寺と稱し、北越に於ける布教の根本道場は、こゝに基礎を完うした

附錄 承陽大師傳



のである。

然るに、大師は山に入らるゝも、名聲却て高く、當時の  
 執權北條時頼は、寶治元年七月、特使を永平寺に遣はし、  
 切に關東の化導を請うたので、大師も已むなく山を出て  
 時頼の館に到り、法を説かるゝこと約半歳餘、時頼に  
 政權を奉還し奉るべきを勸説せられたるも此時の事なり  
 と云ふ、翌寶治二年一月、強ひて鎌倉を辭して永平寺に  
 歸らる、時頼は大師の徳に歸仰して寺領二千石を寄附せ  
 んとし、門弟の一人玄明なるもの、その寄進状を持ち來  
 りて得々として人に觸ら廻はるを、大師は之を穢らはし  
 とて立明を下山せしめられた。  
 また、建長元年には、後嵯峨上皇深く大師の徳風を景仰  
 想の勸王思  
 鎌倉の布  
 教と大師  
 紫衣を辭  
 す

遷化

したまひ、勅使を永平寺に遣はして紫衣を賜はれた、是  
 れ實に常人にありては狂喜歡躍すべき事なるも大師は却  
 つて固辭して受けたまはず、勅使は已むなく歸つて此の  
 旨を奏するに、上皇はますゝその徳を慕ひ、更に旨旨  
 を降したまひ、また大師の俗戚は、種々なる事情を述べ  
 てその志を齟されんことを請ひければ、遂に恩賜を拜  
 受し、永平雖ニ谷淺、勅命重々々、卻被ニ猿鶴笑、紫衣一  
 老翁」と、一偈を賦して勅答せられ、之を高閣に束ねて、  
 一生遂に披着せず、墨染の一老僧として道を傳へられた  
 るが、建長五年七月に永平寺を弟子の孤雲懷辨禪師に譲  
 らる、是より先き、大師は四大の調和を失ひ、病勢日に  
 募られければ、京都に入りて靜養せられたるが、病はま



大師の著述

すく重り、同年八月廿八日夜半に至り、五十四年照二  
 第一天一打三箇躑跳一觸ニ破大千一嘆、渾身無覺、活陷黃泉  
 と、遺偈を書し了り、筆を擲つて化を他界に遷された、  
 是れ實に後深草天皇の御宇紀元一千九百十三年。  
 翌同月三日、之を京都東山赤辻に於て火葬し、遺骨は孤  
 雲懷并親自ら之を奉じて永平寺に歸り、その月の十二日、  
 嚴肅なる葬儀を行ひ、寺の西北隅に塔を建て、承陽と云  
 ふ。

大師、禪餘筆を執りて、後學を提撕したまひ、普勸坐禪  
 儀、正法眼藏、學道用心集、永平清規、廣錄、寶慶記、  
 傘松道詠等あり、近時、承陽大師聖教全集の出版せらる  
 るあり、之を蒐集して洩す事なく、大に世人を資益す。

滅後の光榮

大師、化を他界に遷されてより六百二年、嘉永七年に至  
 り、孝明天皇は特に勅書を永平寺に降し、佛性傳東國師  
 の謚號を贈りたまひ、又廿五年を経て即ち滅後六百廿七  
 年にして、明治十二年、今上天皇は更に承陽大師の徽號  
 を加賜せられ、明治三十五年、六百五十回忌を永平寺に  
 於て修せらるゝや、承陽の勅額を賜ひ、深く大師の徳風  
 を欽仰したまふた、今や、一萬四千の寺院、一百万の檀  
 信、全國に徧滿して、曹洞の禪風、長に盛んなるは、實に  
 大師の體得せられたる深遠なる教理と、高潔なる人格と、  
 後學の教養に務められたる賜なりと云ふべからざる。



### 常濟大師傳

大師の降誕

曹洞宗の太祖と仰がれたまふ常濟大師は、御俗姓は嵯峨源氏の末裔なる瓜生氏にして、越前國多禰邑の豪族である、両親は家督を相續すべき子なきを歎き、殊に母上は多禰の觀音菩薩に一子を授けたまへと祈願をかけ、日々觀音普門品を讀みたまふ事三十三卷、禮拜せらるること三百三十三返宛、感應空しからず、或夜のこと、菩薩の靈夢に感じ、妊娠し、月満ちて端嚴妙相の一子を擧げられた、是れ實に大師にして、時に人皇八十九代龜山天皇の御宇、文永五年戊辰十月八日、(太陽曆に推算すれば同年の十一月廿一日である)、大師は、幼にして、他の群

童と異り、猶ほ襁褓の中にある頃より常に掌を合せて「南無」「南無」と唱へたまひ、やがて四五歳になりたまへば、平生の遊戯にも、石を積みては佛塔に擬へ、土を圍めては佛像に型り、又は母上に隨つて觀音普門品を誦したまふなど、かゝる佛事を爲すを以て、此上なき快樂とせられ、また、六歳の頃、或時母上に伴うて觀世音菩薩に詣てられたるに、菩薩の相好如何にも端嚴微妙なるに感じ、母上に問ひたまふやう、此の菩薩は何處に居まし、如何なる事を爲し、また如何なる功德ましまして、かくは世の人々に尊敬せられたまふにやとて、母上を驚かしめたることもありたりといふ。

大師の教育に全身を捧げられたる御両親は、郷校に就き



出家

て愈學びの道に入らしめたまふに、その聰明英敏は群童を抜きたまひしも、だゞ世間普通の書を繙くことを好まず、暇あれば佛經を讀誦し、三寶を敬禮し、出家求道の志は、幼心にも、絶ゆる時なく、或時、父母の前に己れの志を告げ、出家を請ひたまひたるに、御兩親は一子を出家せしむることは情に於て忍び難く、堅く許したまはなかつたのである、されど、大師の堅き志は御兩親の切なるお諭にも服し難く、一日、御兩親に迫りて、若し我が出家を許したまはずは、絶えて物をも食すまじとして、食を絶ちたまふこと三四日に及びたれば、御兩親も一は驚き、一はその志の堅さに感じ、恩愛の情を割きて、その志を許されければ、大師の歡び譬ふるにも無く

永平寺の修道

直に同國永平寺の懷辨禪師の下に到り、弟子の禮を取られた、時に後宇多天皇の建治元年乙亥四月八日、御齡八歳。父あり、母あり、春風駘蕩花笑ひ鳥謳ふが如き和氣藹々たる家庭を出て、山高く谿深き、峻嚴枯淡なる永平寺に入られたる大師は、六歳の間苦修練行し、早や十三の齡に達したまへば、その二月十八日に大戒を受けて、愈々僧衆の列に入りたまふた。懷辨禪師は、早くも大師の凡庸にあらざるを見、此子後生なりと雖も、夙に大人の所作あれば、他日人天の導師となりて、大に吾が宗風を振ひ興すべし」と歎賞したまひ、朝夕の提撕、殊に特別懇なりしも、既に老年の事



遊とよ諸山しよさんの歴れき

と云ひ、且つは重き病に襲はれたまひしかば「嗚呼我が病は遂に癒えざらん、只憾ひらくは此子(大師)を撫育してその生涯を觀することと」と、深く歎かせられ、大師の事は、その弟子なる徹通義介禪師に托せられた、かくて義介禪師の下に精進辨道せられたる大師は道行頓に進ませられたれば、弘安八年乙酉正月廿日御齡十八歳の折に、諸國行脚の途に上られ、先づ越前寶慶寺の寂圓禪師に參じ、京都に上りては萬壽寺の寶覺禪師、白雲寺の慧曉禪師等に參じ、ますく道器を練り、更に比叡山に登りては、専ら一心三觀の天台の宗意を究め、又浩瀚なる一切藏經をも閱覽せられたりと云ふ。

大師の向上進取の御氣象は、これにも満足せられず、當

悟道ごどう

時名聲天下に高き法燈國師を遠く紀州由良の興國寺に訪ひ、又普く天下の高僧碩徳の堂奥を叩き、砥勵至らざるなく、正應元年戊子の秋、漸く越前に歸り寶慶寺に到りて、再び寂圓禪師に參じ、尋て永平寺に登りて、義介禪師を親しく省し、正應二年己丑御齡二十二の折に、義介禪師に隨ひ、錫を加賀國大乘寺に移されたるが、或時の事、大師法華經を觀讀したまひ、法師功德品の中の「父母所生眼悉見三千界」の文に至り、大に省悟したまひ、遂に方丈に到り、その所解を述べられたるも、峻嚴なる義介禪師は之を許したまはず、大師はますく奮勵して工夫に努め、傍ら一切藏經を看讀しつゝ、こゝに五六年の歲月を過されたるが、永仁二年甲午の十月二日義介



禪師、上堂せられて、支那の趙州禪師が「平常心是道」と云はれたる事に就て提示したまへるを聞き、豁然として大悟して曰く、「我れ會せり」と、それより義介禪師と數次問答の結果、禪師は大師の見所、眞に佛祖の肺肝神髓に徹する所あるを以て、こゝに印可證明を與へ、且つ曰く、「爾ち向後洞上の宗風を起すべし」と、激賞せられた、大師が家を出て以來約廿年間幾多の辛酸を嘗められたる修道の功は、こゝに至りて現はれ、大無上大安樂の境界に到られた、かくて翌永仁三年乙未正月十四日、義介禪師の室に入りて大法を相續し、教主釋迦牟尼佛より嫡々相承せられたる第五十四世の祖とならせられた、時に御齡二十八歳。

化導

自利の道行全く了へたる大師は、今や利他の化導に従事せらるゝ事となり、翌年即ち永仁三年丙申の秋、阿波國海部某なるもの、請に應じて、遠く錫を飛ばして南海に向ひ阿波に城滿寺を建立せられた、越へて正安元年己亥の冬、師の義介禪師の召に應じ、城滿寺を辭して加賀の大乗寺に到り、師の左右に侍し、且つ本師に代りて、多くの參學の僧侶や、有縁の道俗を化導せられた、今日まで傳はれる「傳光錄」なるものも、此間に御提示なされたものである、又、富樫家尙等の法澤に浴したも此際のことである、かゝる間に師の義介禪師は既に御老衰に及ばせられ、今は寺務に堪へ難き状態になり、こゝに大乗寺を退いて後席を大師に譲られ、國師の道聲はますます高



くなり、道俗の歸向するもの非常に多くなりたりと云ふことである。

此頃加賀國に法苑山淨住寺の住職なる可鐵鏡西堂と云へる人大師の徳風を慕ひ、檀越と相謀りて淨住寺を大師に譲られたので、その請を容れ、開山第一世となられ、又能登國滋野信直夫婦も大に大師の徳風を敬慕し、同國酒井保の地若干を寄附し、富樫家方も(家尙の嫡男)若干の資財を捧げ、愈々伽藍の建立が出来上つた、此時には十六羅漢の一人たる伐闍羅弗多羅尊者が應現せられ、種々の祥瑞もあつたと傳へらる、これが即ち洞谷山永光寺で、正和二年、大師時に四十六歳、又明くる正和三年には、能登國羽咋郡司得田某なるものあり、勝地を寶達の下

後醍醐天皇の歸崇

に卜し光孝寺を建立して大師を懇請して開山始祖といはした。

かくのごとく、大師は約廿年の間に或は南海の邊陲に、或は加能越に、到處人を度し寺を建て、徳風日ましに盛んであつたが、大師の法運は更に發展して、元亨元年には定賢律師の請を容れて律院を改めて禪寺となし、諸嶽山總持寺と改稱し、その歳の六月八日を以て愈々開堂演法したまふことになつた。

後醍醐天皇は我國歴代の天皇方の中でも、最も御叡明に渡らせられたるが、何時しか大師の高徳を聞召され、元亨元年八月孤峯覺明和尚を勅使として、禪に就ての十種の疑問を擧げて、大師の答解を求められたので、大師



は一々これに奏對せられたるが、如何にも義理明白で、深く聖意に愜ひ、叡感殊に斜ならず、紫衣法服を賜はり、且つ此歳の九月十四日に、藏人頭左近衛中將藤原行房卿に命じて、總持寺の三大字の勅額を賜ひ、特に陞せて一宗の僧綱大官寺と爲したまうた。

後醍醐天皇は、翌元亨二年、大師に就て佛前正傳の大戒をお受けなされて菩薩戒弟子となられ、此歳の八月二十八日には特に繪旨を下して總持寺を以て「日本曹洞の本山、賜紫出世の道場」と爲さしめたまひ、元亨三年には總持寺を一宗の本山鎮護國家の道場とせられ、同四年には十條の龜鑑を制定して法子法孫の依るべき所を示された。

大師の入滅

上は皇室の貴きより、下は底下白屋の賤きに至る迄、廣く感化を及ぼされた大師は、今は化緣遠からずして盡くべきを知りたまひしものか、元亨四年七月に總持寺をその徒弟峨山禪師に譲りて、酒井の永光寺に退隱したまひ、翌正中二年八月に永光寺をその徒弟明峰禪師に譲られた、かくて大師は此頃より些か病症を示されたるが、書面を峨山禪師初め、諸方のお徒弟方に發して膝下に召し集め、八月八日より八大人覺の御提示があり、十四日には剃髮沐浴して、末後報恩の志なりとて、先師徹通禪師の御供養を營み、翌十五日には(太陽曆に推算す)恒例の羅漢供養を了へ、その夜將に半ばならんとする頃、鐘を鳴して大衆を方丈に集められたれば、人皆何事ならんと



怪み居たるに、大師は座に登り、大衆に示して曰く、「念起是病、不續是藥、一切善惡、都莫思量、纔涉思量、白雲萬里」と、且つ門人等に囑して曰く、「予が化縁は既に盡きて泥洹(入滅)正に時至る、汝等向後俱に勵みて我法をして永く斷絶せしむること勿れ」と、更に筆を執りて「自耕自種閑田地、幾度賣來買去新、無限靈苗繁茂處、法堂上見挿鋤人」と書し了り、溘然として化を他界に遷された、時に御齡五十八歳、かくて廿一日法に依りて荼毘(火葬)したてまつり、無數の舍利を得たれば、之れを總持寺を始め、大乘寺、永光寺、淨住寺に頒ちて各々塔を建て、永遠に供養したてまつることに致した。

滅後の光榮

大師の著述

大師入滅せられて、三十年を経て、正平九年の三月二日、後村上天皇は、「佛慈禪師」の徽號を賜ひ、更に後四百年八年を経て、安永元年十一月廿九日に後桃園天皇は、「弘徳圓明國師」と追諡せられ、今上陛下は、更にまた明治四十二年九月八日、特別の御敍旨を以て「常濟大師」の大師號が御宣下になりた、而して大師の下には、峨山、明峰、無涯、壺庵、珍山、默譜等の學徳兼備の名僧碩徳を出し、曹洞の禪風をして、全國に普及するに至らしめた。

大師の著として今猶ほ世を資益するもの、坐禪用心記、三根坐禪說、傳光錄、信心銘拈提等がある。



### 曹洞宗聖日表

一月二十六日	承陽大師降誕會
二月十五日	釋尊涅槃忌
四月八日	釋尊降誕會
九月二十九日	承陽常濟兩祖忌
十月五日	達磨大師忌
十一月二十一日	常濟大師降誕會
十二月八日	釋尊成道會

冠注曹洞教會修證表與付

定價金拾五錢

著述人 峯 玄 光

發行者 今村延雄

東京市芝區勝月町十八番地

印刷者 太田音次郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 誠秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

明治四十四年六月廿六日印刷  
明治四十四年六月廿九日發行

不許  
複製

發行所 東京芝區勝月町 鴻盟社

電話芝二〇二七番

(振替貯金口座東京二九七九番)







村土佛敎講論集 全一冊	定價金 一圓二錢
博士 佛敎講錄 全一冊	定價金 九錢
曹洞宗 說敎講錄 全一冊	定價金 八錢
修證義 全一冊	定價金 九錢
洞上 調經錦囊 全一冊	定價金 六錢
洞上 調經錦囊 全二冊	定價金 一圓
洞上 調經錦囊 全三冊	定價金 一圓二錢
洞上 調經錦囊 全四冊	定價金 一圓四錢
洞上 調經錦囊 全五冊	定價金 一圓六錢
洞上 調經錦囊 全六冊	定價金 一圓八錢
洞上 調經錦囊 全七冊	定價金 二圓
洞上 調經錦囊 全八冊	定價金 二圓二錢
洞上 調經錦囊 全九冊	定價金 二圓四錢
洞上 調經錦囊 全十冊	定價金 二圓六錢
洞上 調經錦囊 全十一冊	定價金 二圓八錢
洞上 調經錦囊 全十二冊	定價金 三圓
洞上 調經錦囊 全十三冊	定價金 三圓二錢
洞上 調經錦囊 全十四冊	定價金 三圓四錢
洞上 調經錦囊 全十五冊	定價金 三圓六錢
洞上 調經錦囊 全十六冊	定價金 三圓八錢
洞上 調經錦囊 全十七冊	定價金 四圓
洞上 調經錦囊 全十八冊	定價金 四圓二錢
洞上 調經錦囊 全十九冊	定價金 四圓四錢
洞上 調經錦囊 全二十冊	定價金 四圓六錢
洞上 調經錦囊 全二十一冊	定價金 四圓八錢
洞上 調經錦囊 全二十二冊	定價金 五圓
洞上 調經錦囊 全二十三冊	定價金 五圓二錢
洞上 調經錦囊 全二十四冊	定價金 五圓四錢
洞上 調經錦囊 全二十五冊	定價金 五圓六錢
洞上 調經錦囊 全二十六冊	定價金 五圓八錢
洞上 調經錦囊 全二十七冊	定價金 六圓
洞上 調經錦囊 全二十八冊	定價金 六圓二錢
洞上 調經錦囊 全二十九冊	定價金 六圓四錢
洞上 調經錦囊 全三十冊	定價金 六圓六錢
洞上 調經錦囊 全三十一冊	定價金 六圓八錢
洞上 調經錦囊 全三十二冊	定價金 七圓
洞上 調經錦囊 全三十三冊	定價金 七圓二錢
洞上 調經錦囊 全三十四冊	定價金 七圓四錢
洞上 調經錦囊 全三十五冊	定價金 七圓六錢
洞上 調經錦囊 全三十六冊	定價金 七圓八錢
洞上 調經錦囊 全三十七冊	定價金 八圓
洞上 調經錦囊 全三十八冊	定價金 八圓二錢
洞上 調經錦囊 全三十九冊	定價金 八圓四錢
洞上 調經錦囊 全四十冊	定價金 八圓六錢
洞上 調經錦囊 全四十一冊	定價金 八圓八錢
洞上 調經錦囊 全四十二冊	定價金 九圓
洞上 調經錦囊 全四十三冊	定價金 九圓二錢
洞上 調經錦囊 全四十四冊	定價金 九圓四錢
洞上 調經錦囊 全四十五冊	定價金 九圓六錢
洞上 調經錦囊 全四十六冊	定價金 九圓八錢
洞上 調經錦囊 全四十七冊	定價金 十圓
洞上 調經錦囊 全四十八冊	定價金 十圓二錢
洞上 調經錦囊 全四十九冊	定價金 十圓四錢
洞上 調經錦囊 全五十冊	定價金 十圓六錢
洞上 調經錦囊 全五十一冊	定價金 十圓八錢
洞上 調經錦囊 全五十二冊	定價金 十一圓
洞上 調經錦囊 全五十三冊	定價金 十一圓二錢
洞上 調經錦囊 全五十四冊	定價金 十一圓四錢
洞上 調經錦囊 全五十五冊	定價金 十一圓六錢
洞上 調經錦囊 全五十六冊	定價金 十一圓八錢
洞上 調經錦囊 全五十七冊	定價金 十二圓
洞上 調經錦囊 全五十八冊	定價金 十二圓二錢
洞上 調經錦囊 全五十九冊	定價金 十二圓四錢
洞上 調經錦囊 全六十冊	定價金 十二圓六錢
洞上 調經錦囊 全六十一冊	定價金 十二圓八錢
洞上 調經錦囊 全六十二冊	定價金 十三圓
洞上 調經錦囊 全六十三冊	定價金 十三圓二錢
洞上 調經錦囊 全六十四冊	定價金 十三圓四錢
洞上 調經錦囊 全六十五冊	定價金 十三圓六錢
洞上 調經錦囊 全六十六冊	定價金 十三圓八錢
洞上 調經錦囊 全六十七冊	定價金 十四圓
洞上 調經錦囊 全六十八冊	定價金 十四圓二錢
洞上 調經錦囊 全六十九冊	定價金 十四圓四錢
洞上 調經錦囊 全七十冊	定價金 十四圓六錢
洞上 調經錦囊 全七十一冊	定價金 十四圓八錢
洞上 調經錦囊 全七十二冊	定價金 十五圓
洞上 調經錦囊 全七十三冊	定價金 十五圓二錢
洞上 調經錦囊 全七十四冊	定價金 十五圓四錢
洞上 調經錦囊 全七十五冊	定價金 十五圓六錢
洞上 調經錦囊 全七十六冊	定價金 十五圓八錢
洞上 調經錦囊 全七十七冊	定價金 十六圓
洞上 調經錦囊 全七十八冊	定價金 十六圓二錢
洞上 調經錦囊 全七十九冊	定價金 十六圓四錢
洞上 調經錦囊 全八十冊	定價金 十六圓六錢
洞上 調經錦囊 全八十一冊	定價金 十六圓八錢
洞上 調經錦囊 全八十二冊	定價金 十七圓
洞上 調經錦囊 全八十三冊	定價金 十七圓二錢
洞上 調經錦囊 全八十四冊	定價金 十七圓四錢
洞上 調經錦囊 全八十五冊	定價金 十七圓六錢
洞上 調經錦囊 全八十六冊	定價金 十七圓八錢
洞上 調經錦囊 全八十七冊	定價金 十八圓
洞上 調經錦囊 全八十八冊	定價金 十八圓二錢
洞上 調經錦囊 全八十九冊	定價金 十八圓四錢
洞上 調經錦囊 全九十冊	定價金 十八圓六錢
洞上 調經錦囊 全九十一冊	定價金 十八圓八錢
洞上 調經錦囊 全九十二冊	定價金 十九圓
洞上 調經錦囊 全九十三冊	定價金 十九圓二錢
洞上 調經錦囊 全九十四冊	定價金 十九圓四錢
洞上 調經錦囊 全九十五冊	定價金 十九圓六錢
洞上 調經錦囊 全九十六冊	定價金 十九圓八錢
洞上 調經錦囊 全九十七冊	定價金 二十圓
洞上 調經錦囊 全九十八冊	定價金 二十圓二錢
洞上 調經錦囊 全九十九冊	定價金 二十圓四錢
洞上 調經錦囊 全一百冊	定價金 二十圓六錢

承陽大師聖敎全集 全三冊	定價金 三圓
辨惑指南 全一冊	定價金 三圓
須彌要門 全一冊	定價金 四圓
文底祇沈 全一冊	定價金 五圓
洒落文庫 全一冊	定價金 六圓
說敎講習錄 全一冊	定價金 七圓
演說講習錄 全一冊	定價金 八圓
禪戒鈔 全一冊	定價金 九圓
佛敎八面觀 全一冊	定價金 十圓
三修裝活話(加藤) 全一冊	定價金 十一圓
三修裝活話(加藤) 全二冊	定價金 十二圓
三修裝活話(加藤) 全三冊	定價金 十三圓
三修裝活話(加藤) 全四冊	定價金 十四圓
三修裝活話(加藤) 全五冊	定價金 十五圓
三修裝活話(加藤) 全六冊	定價金 十六圓
三修裝活話(加藤) 全七冊	定價金 十七圓
三修裝活話(加藤) 全八冊	定價金 十八圓
三修裝活話(加藤) 全九冊	定價金 十九圓
三修裝活話(加藤) 全十冊	定價金 二十圓
三修裝活話(加藤) 全十一冊	定價金 二十一圓
三修裝活話(加藤) 全十二冊	定價金 二十二圓
三修裝活話(加藤) 全十三冊	定價金 二十三圓
三修裝活話(加藤) 全十四冊	定價金 二十四圓
三修裝活話(加藤) 全十五冊	定價金 二十五圓
三修裝活話(加藤) 全十六冊	定價金 二十六圓
三修裝活話(加藤) 全十七冊	定價金 二十七圓
三修裝活話(加藤) 全十八冊	定價金 二十八圓
三修裝活話(加藤) 全十九冊	定價金 二十九圓
三修裝活話(加藤) 全二十冊	定價金 三十圓
三修裝活話(加藤) 全二十一冊	定價金 三十一圓
三修裝活話(加藤) 全二十二冊	定價金 三十二圓
三修裝活話(加藤) 全二十三冊	定價金 三十三圓
三修裝活話(加藤) 全二十四冊	定價金 三十四圓
三修裝活話(加藤) 全二十五冊	定價金 三十五圓
三修裝活話(加藤) 全二十六冊	定價金 三十六圓
三修裝活話(加藤) 全二十七冊	定價金 三十七圓
三修裝活話(加藤) 全二十八冊	定價金 三十八圓
三修裝活話(加藤) 全二十九冊	定價金 三十九圓
三修裝活話(加藤) 全三十冊	定價金 四十圓
三修裝活話(加藤) 全三十一冊	定價金 四十一圓
三修裝活話(加藤) 全三十二冊	定價金 四十二圓
三修裝活話(加藤) 全三十三冊	定價金 四十三圓
三修裝活話(加藤) 全三十四冊	定價金 四十四圓
三修裝活話(加藤) 全三十五冊	定價金 四十五圓
三修裝活話(加藤) 全三十六冊	定價金 四十六圓
三修裝活話(加藤) 全三十七冊	定價金 四十七圓
三修裝活話(加藤) 全三十八冊	定價金 四十八圓
三修裝活話(加藤) 全三十九冊	定價金 四十九圓
三修裝活話(加藤) 全四十冊	定價金 五十圓
三修裝活話(加藤) 全四十一冊	定價金 五十一圓
三修裝活話(加藤) 全四十二冊	定價金 五十二圓
三修裝活話(加藤) 全四十三冊	定價金 五十三圓
三修裝活話(加藤) 全四十四冊	定價金 五十四圓
三修裝活話(加藤) 全四十五冊	定價金 五十五圓
三修裝活話(加藤) 全四十六冊	定價金 五十六圓
三修裝活話(加藤) 全四十七冊	定價金 五十七圓
三修裝活話(加藤) 全四十八冊	定價金 五十八圓
三修裝活話(加藤) 全四十九冊	定價金 五十九圓
三修裝活話(加藤) 全五十冊	定價金 六十圓
三修裝活話(加藤) 全五十一冊	定價金 六十一圓
三修裝活話(加藤) 全五十二冊	定價金 六十二圓
三修裝活話(加藤) 全五十三冊	定價金 六十三圓
三修裝活話(加藤) 全五十四冊	定價金 六十四圓
三修裝活話(加藤) 全五十五冊	定價金 六十五圓
三修裝活話(加藤) 全五十六冊	定價金 六十六圓
三修裝活話(加藤) 全五十七冊	定價金 六十七圓
三修裝活話(加藤) 全五十八冊	定價金 六十八圓
三修裝活話(加藤) 全五十九冊	定價金 六十九圓
三修裝活話(加藤) 全六十冊	定價金 七十圓
三修裝活話(加藤) 全六十一冊	定價金 七十一圓
三修裝活話(加藤) 全六十二冊	定價金 七十二圓
三修裝活話(加藤) 全六十三冊	定價金 七十三圓
三修裝活話(加藤) 全六十四冊	定價金 七十四圓
三修裝活話(加藤) 全六十五冊	定價金 七十五圓
三修裝活話(加藤) 全六十六冊	定價金 七十六圓
三修裝活話(加藤) 全六十七冊	定價金 七十七圓
三修裝活話(加藤) 全六十八冊	定價金 七十八圓
三修裝活話(加藤) 全六十九冊	定價金 七十九圓
三修裝活話(加藤) 全七十冊	定價金 八十圓
三修裝活話(加藤) 全七十一冊	定價金 八十一圓
三修裝活話(加藤) 全七十二冊	定價金 八十二圓
三修裝活話(加藤) 全七十三冊	定價金 八十三圓
三修裝活話(加藤) 全七十四冊	定價金 八十四圓
三修裝活話(加藤) 全七十五冊	定價金 八十五圓
三修裝活話(加藤) 全七十六冊	定價金 八十六圓
三修裝活話(加藤) 全七十七冊	定價金 八十七圓
三修裝活話(加藤) 全七十八冊	定價金 八十八圓
三修裝活話(加藤) 全七十九冊	定價金 八十九圓
三修裝活話(加藤) 全八十冊	定價金 九十圓
三修裝活話(加藤) 全八十一冊	定價金 九十一圓
三修裝活話(加藤) 全八十二冊	定價金 九十二圓
三修裝活話(加藤) 全八十三冊	定價金 九十三圓
三修裝活話(加藤) 全八十四冊	定價金 九十四圓
三修裝活話(加藤) 全八十五冊	定價金 九十五圓
三修裝活話(加藤) 全八十六冊	定價金 九十六圓
三修裝活話(加藤) 全八十七冊	定價金 九十七圓
三修裝活話(加藤) 全八十八冊	定價金 九十八圓
三修裝活話(加藤) 全八十九冊	定價金 九十九圓
三修裝活話(加藤) 全九十冊	定價金 一百圓

近世 善惡報因緣集 全二冊	定價金 四圓
林 指 月 全一冊	定價金 三圓
いるはの 解 全一冊	定價金 二圓
天台四教義(縮刷) 全一冊	定價金 一圓
原人論(縮刷) 全一冊	定價金 一圓
佛敎大意 全一冊	定價金 一圓
一實神道 全一冊	定價金 一圓
禪學大意 全一冊	定價金 一圓
結制の由來 全一冊	定價金 一圓
觀音經點附 全一冊	定價金 一圓
金剛經講解(慈愛) 全一冊	定價金 一圓
曹洞宗要法話 全一冊	定價金 一圓
因縁百話 全一冊	定價金 一圓

高王 觀音經 全一冊	定價金 五圓
佛敎生會講式 全一冊	定價金 四圓
洞上四分節 全一冊	定價金 三圓
曹洞宗信稿日課禮誦法 全一冊	定價金 二圓
僧 那 法 全一冊	定價金 一圓
延命地藏菩薩經 全一冊	定價金 一圓
佛 遺 教 經 全一冊	定價金 一圓
全 小 全一冊	定價金 一圓
信心銘 證道歌 全一冊	定價金 一圓
善 量 品 全一冊	定價金 一圓
坐禪用心記 落草談(昨上節) 全一冊	定價金 一圓
般若心經講要(大内) 全一冊	定價金 一圓
大祭祀日の由來 全一冊	定價金 一圓

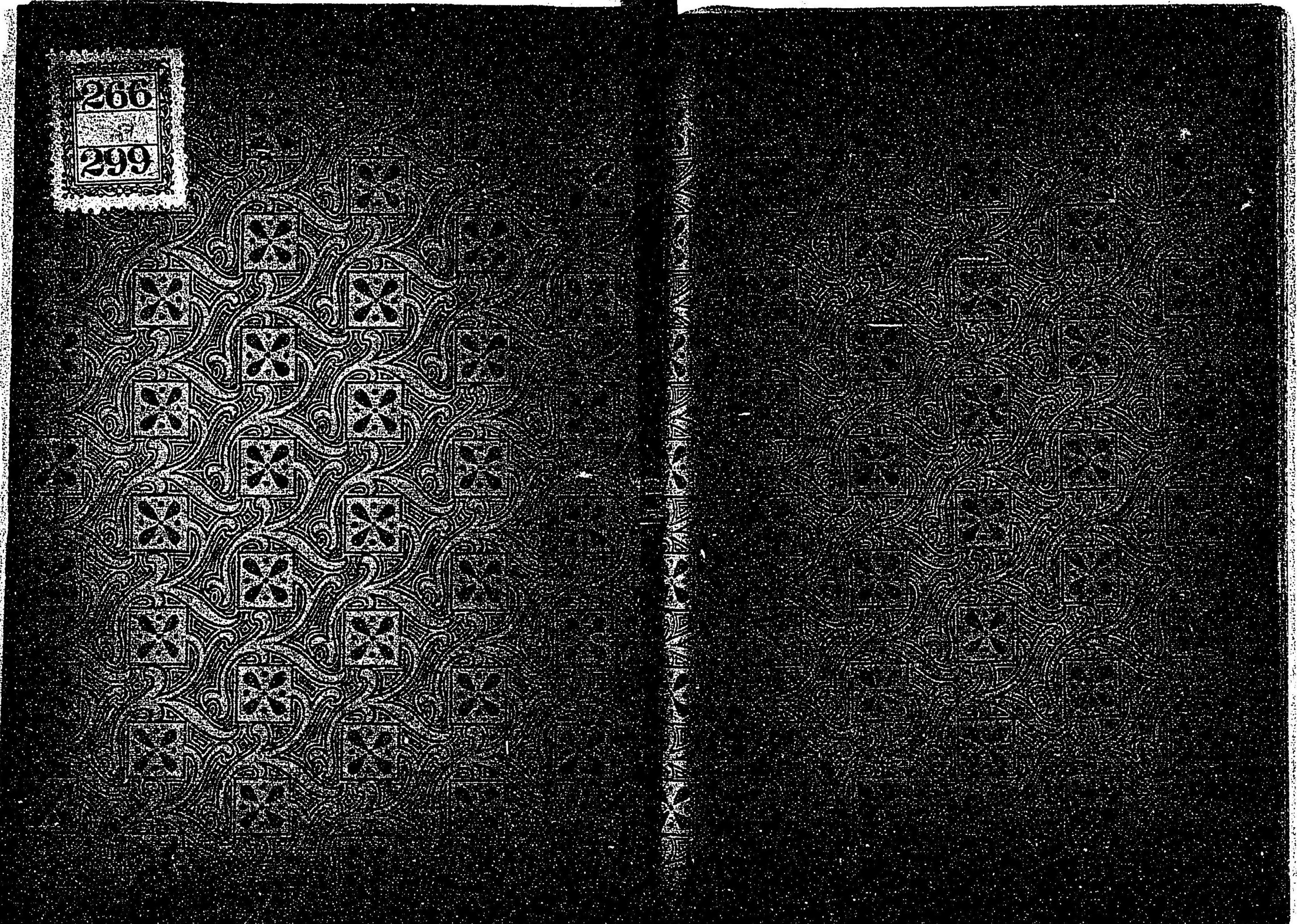




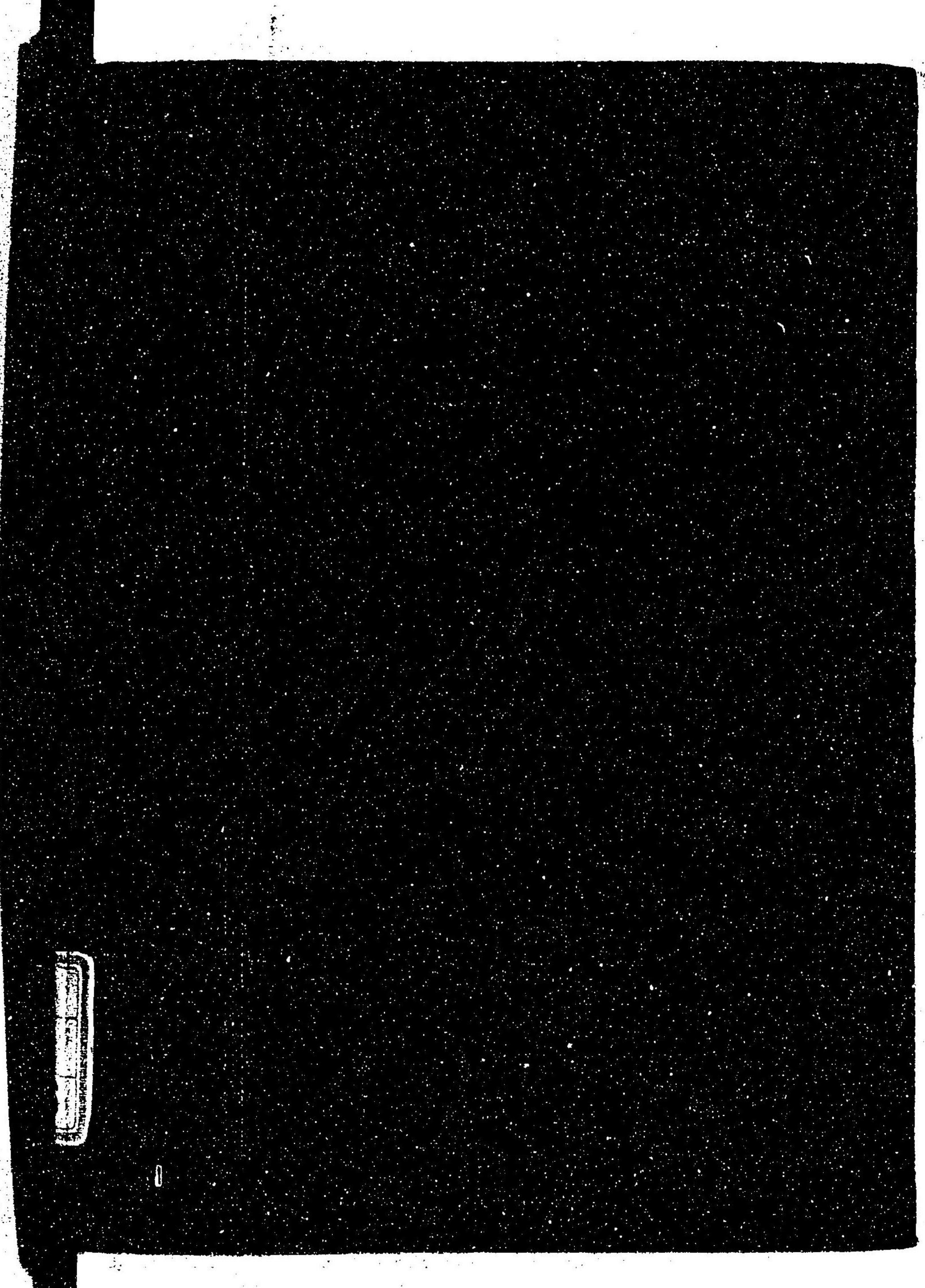


266

299







Small, illegible rectangular mark or stamp.

Small, illegible mark or character.



019665-000-6

特61-96

曹洞教会修証義

峯玄光/注

M44.6

ABG-0455





